



坪内  
逍遙  
脚本に關する訴訟事件の鑑  
④



本間文庫  
文庫 14  
A 140  
4



文庫4  
A140  
4



下字二

其四 箱崎文庫事件

大正三年九月呼びあし玉柳箱崎文庫に  
関する調査事項はたの三條である。

一、玉柳箱崎文庫と稱する演劇脚本は何  
年何人の著作ニシテ演劇興行ニ實行シタ  
ルハ何年何月ナルカ。

二、右藝題ト同名又ハ類似ノ演劇脚本ヲ同  
一人ニアラサシテ著作シタルモアリヤ。

三、右箱崎文庫ノ脚本使用料ハ大都曾ト町

實に近く考へられぬは「盤井物語」であつた。圖書刊  
 行常本「列侯深秘録」の中に在る。此書によつて  
 と、國主は右衛門佐馬田忠之とあつて、筑前の  
國主である。栗山大膳は、實は源の利章とあ  
 つて、父は栗山備後の入道、卜庵と号すとある。寛  
 永五年の思之は、大膳の為に宝王丸といふ大  
 船を造らした。大膳はそのを諫め止めさせ、  
 としちか聴かれぬので家老職を辞するといふのが  
 事の存端である。君ハ十右衛門といふのが講談の  
 倉橋重次夫、刑の七右衛門に當る。もとよみ忠之

No. ....

徳川幕府の歴史

此時は前々の例とは違つて、番附も印刷脚  
 楳のよの下附せぬが、前記の如く諮詢され  
 たのであつた。手元には、當の箱崎文庫が  
 無いばかりでなく、黒田騷動に關するものは、  
 何も無いであつた。で、先づ、吉村（河竹繁俊氏）が  
 右の事情を傳へて參考書類の借用を言ひ遣る  
 と同時に、伊集院の「世日本書」に據りて  
 例によつて材源調（一）を見たと見た。

No. ....

2

安養寺の

の侍童とある 講談の紅陽寺印、刻の先陽上人に相當する人物は見えなかつた。

大正三年九月の太陽の記録に載つた森鷗外（森鷗外）の作「栗山大膳」も、先づ強し事實のまゝと評すよと思つた。

寫事で傳はつてゐる、明治十五年に活字

た寛永相崎文庫は、例の學泉社發行の傳入本であらうか、多分この講釋師の種本であらう草

紙の白繪譯も、まゝ此書と天草軍紀を以て林源とすゝめらるゝ。主な人物の名を挙げて

其の姓定打粵人後に

見、黒田右衛門、左衛門、栗山大膳、倉橋重

大夫、毛屋下總、紅陽法印、道村要人、義

獵師定打平次（後に平次兵衛）、お秀の方（局）

五十嵐（お秀の方）、倉橋とが密傳する事、

局（お秀の方）、水銀を飲ませる事、局自害の事、有河

が倉橋に計られて大船の圖を懸する事、博多小

女郎と身請けの事、つゞき義弘の事、大久保彦

左衛門が此事件に關係する事は皆此書中に其種が

あつた。

近世日本演劇史に據ると、明治以前にも一二の

~~近世日本演劇史~~

1050 徳島県立歴史博物館

No.

52

No.

57

類作 傳 講へて、尤の敷演あること感のゆゑ。  
 一、御作 譚博多 新織 嘉永五年八月、申村智。  
 二、御作 三世 瀬川 如翠の作で、小園次のためし書  
 きあつてもある。

二、御作 三世 瀬川 如翠の作で、小園次のためし書  
 きあつてもある。

二、御作 三世 瀬川 如翠の作で、小園次のためし書  
 きあつてもある。

二、御作 三世 瀬川 如翠の作で、小園次のためし書  
 きあつてもある。

二、御作 三世 瀬川 如翠の作で、小園次のためし書  
 きあつてもある。

二、御作 三世 瀬川 如翠の作で、小園次のためし書  
 きあつてもある。

大阪方面を多岐にわたる感ありけり  
 田 故河竹其水

れによつて、更に調査を進めると、年代順の  
 次の如くであつた。

〔筑紫巻談浪白鐘〕 明治八年十月 新富座

三、おちばち河竹新七の書であつたので、菊五郎(毛谷主水)  
 考三郎(栗山大膳)で進し、殿中紅葉の間の箇、試  
 合が呼ぶ物とあつて、大評判。

四、玉搦笥箱崎文庫 明治十年頃 大坂直須

浪花座(前の戎座)

この興行年月には、多少の疑問が伴ひ、又其作者  
 も或は勝地進と其子諒氣との合作とも、能達一個の

このことが分

これらの作の

No. 4 54

跡は其の  
 結核  
 16

No. 3 53

1030 結核 16

人物の  
早し名前  
だけ手黒  
田家一憚  
つて白燈  
譚のそれ  
に倣つて

作言の、やう曖昧であつた。

五、黒白論、徹分博多 明治十五年十一月 新

富座

こゝには野阿弥が其前作「筑紫講談」を所説海録  
 脚本書き直したるもの。紅葉の回が大ありであ  
 つたが、それを城外松原の場の講談として書  
 き加へた。菊池大領(九代目の家母老乳)浦橋重  
 太夫(大國次、安陽寺、紅養、浅川主水(右國次)、  
 馬山大膳(岡十郎)、片村平次(同上)、小姓学人、  
 後におおの方(紫若)とくした。ついで此の講談  
 1050 相馬半次

を筆けておく。

一幕の一場は筑紫橋口天神の場、其二は同別  
 當安陽寺の場、博多廓花菱屋の場、廓外八町  
 繩子の場、遊女小女郎の筒夫の浅川主水は  
 講談の右河鞍河に當る。二幕目は白洲紅葉(表  
 考問の場、其二は大野村狩人内の場、其三  
 は藩中浦橋住居の場、其二是筑紫御殿諫言の  
 場、其三是城外松原の場、四幕目は浅川主水  
 切腹の場、其二是筑前國廣瀬山の場、其三是  
 同佐屋形山評平次殺しの場、大詰は老女五十風殺し  
 1050 徳田老臣

対決の場。

次に、諸作の箱崎文庫との比較用に、  
筑紫若狭浪白縫の場割及び其要點を書きあし  
て見る。

序幕の一は箱崎八幡石段の場、其二は天神  
町紅陽院の場、この場大領兼池多門之助、家  
老鳥山豊後之助紅陽院、其小姓花本數馬、實  
はアザミなどか顔を出す。二幕目は廣瀬屋敷の  
腹の場、其二は兼池城内詮議の場、紅陽院  
は召捕りの傍はけし、立廻り、慘酷な拷問を受

け、首を斬られる。

三幕目は辰澤峠観音堂の  
場、其同地獄谷の場、落合村狩人内の場、辰澤  
峠間道越の場、此幕安後の七霊がある、  
貞行が狼の歸、アザミを救ひ、伴が歸る事がある  
り、主水がアザミの兄の獵師平次と谷へ斬り居  
すこと、死なうで登るまで、主水に一味する件がある  
がある。四幕目は兼池本城謀害の場、お筆の  
方部屋の場、奥御殿酒宴の場、紅葉の間、紅葉試  
合の場、いふまでもなく諺言の場、賞試合の場  
が眼目で、主水が豊後之助に伏し、

~~三幕目~~



一旦自殺せんとする件が見物を喜ばせさるる也。五幕  
目は松ヶ崎追分の場。同城内上使の場。六幕  
目は木屋所債座敷の場。三利家向注所の場、  
本園蓄池屋敷の場。これが大詰である。

此作、人名は大抵白隠譚の通りであるが、筋  
は別である。草紙では青柳春三郎、此劇では青柳主  
水。二羽が倉橋幸次夫であり、毛谷主水である。大  
坪孫右衛門といふ人物がでて、鳥山豊後の旅籠へ去  
り、掛けて、調候に軒旋す事などもある。  
玉柳翁相崎文庫の場割並に役名は、右の

(或部分は講談本のそれに或部分は)

筑紫講談に似てゐる。先づ場割を挙げる。

序幕は筑前大野山麓の場、正満河原異夢の  
場、孝陽法師浴室の場。二幕目は橋口天神社  
内の場、安養禪寺裏山の場。三幕目は馬田家  
大廣間の場、孝陽法師拷問の場。四幕目は有  
川駿河婚禮の場、同奥座敷切腹の場。五幕目  
は霞ヶ原上屋敷の場、愛妾お秀寝間の場。六  
幕目は那中紅葉の間の場、周防沖合難風の場。  
七幕目は毛谷主水立身の場、栗山大崎退城の  
場。八幕目は東武鎌倉河岸の場。大詰は阿部

後宅對決の場

役名の主なものは馬田右衛門佐忠之、栗山大膳、毛谷主水、倉橋重太夫の近、有川駿河、孝陽法師(幼名波井谷友千代)、小姓要人、実娘お秀、獵人強平次、後に倉橋里右衛門、星野忠右衛門、大久保彦左衛門、傾城船娘等。

活動寫真の如く目先きの変化も、お助之で、強、少も人情の琴線に触れた所は多い。孝陽法師の前後件は筑紫講談と何れも、源、右衛門の、惨酷な拷問、首を斬られ、舞臺、ほり、さし廻り、

同じく、紅葉の間の岡城合も同様。六幕目周防

沖の場の如きは、天徳の筋と取れた、墮分人を食

つた飯向で、孝陽の怨霊が、棚の市と、木琴

を弾する盲法師と成り、船中に怪を為す件がある

又鎌倉河岸で浪人となる。大膳と大久保とが

豊馬し、すくに大久保が斬旋するとなり、對決と

なすに、大久保が裁法を行ふ、甚樹き境

梅など、不條理と極めたのである。紅葉の間の場

の如きも、筋は「黒白論」の松原の場と同じものが

が、人物の描寫が物になつてゐず、大膳が只の

木偶坊である。黒白論の方は、筋も立ち、統一も  
あり、人情にも触れている。大膳がさすめん、大家老  
の度量の人物に夢中である。

以上で、ほ、比較研究は終わったが、幸ひに早大図書  
館に明治初年の大坂芝居の番附の綴込があった  
から、更にその調べ見せ。明治十年九月  
直垣城戎座の繪本が出来た。其以前には  
類作の興行された跡を見附からあつた。外題  
は、「恩夢の祝言、誠志の諫言、割書き」とい  
梯岡頼崎文庫とあり、役者は中村徳助(安養主

1020 徳島県立歴史民俗資料館蔵

水、中村春右衛門(大膳、市川荒五郎(物右衛門、  
彦左衛門)、実川近若(有川駿河)、山嵐瑞雲(黒田  
右衛門)、実川正朝(お秀、濃尾与六)平平次)等、  
作者は近松川十翁、勝謔翁とあつた。たほ此  
同い綴込の興行の、其の、其の、其の、其の、其の、  
他も分つて、其の、其の、其の、其の、其の、其の、  
は、其の、其の、其の、其の、其の、其の、

鑑定事項  
一、玉櫛笥箱付文庫ト稱スル、清野脚本ハ何年  
何人ノ著作ニシテ、清野脚本ニシテ、何人ノ著作ニシテ、

1020 徳島県立歴史民俗資料館蔵

下字

四年以前ナラザルコトハ確實ナリ。鑑定者ハ  
 菊西松ヲ明治四五年以後ニ発行ニタル多數  
 一書附テ調査ニタルガ、箱崎文庫上演一番  
 附一最モ古キモノハ明治十年九月道頓堀戎  
 座(後ニ浪花座ト改稱)ニ於テ中村福助(今ノ梅  
 玉)中村雀右衛門、曾川近若、市川荒五郎等  
 一演シタル時ノモノ、他ヲ發見スル能ハザ  
 リキ。此書附面ニ見エタル座附作者ハ近松  
 八十翁、勝蔭花等ナリ。コノニ蔭花トアル  
 川父ノ蔭花ニシテ即チ後ノ能進ナルベシ。

1030 相馬屋藏

下字

年何月ナリカ。  
 答  
 玉柳翁箱崎文庫ハ大段ノ狂言作者故勝蔭花  
 (後ニ能進)ノ創作ナリ。或ハ其子彦輔(後ニ蔭  
 花ト改シト)ノ合作トモ傳フ。其遺刻トシテ  
 一興行ヲ實行セル最初ノ年月ハ之ヲ精確ニ  
 知ル能ハズ。然レモ右ノ勝能進ハ初ノ東京  
 ノ狂言作者ニシテ、其大段ニ赴キテ彼ノ地  
 ノ興行ニ關係セシハ、明カニ明治四年三月  
 後ノ事ナルガ故ニ、箱崎文庫ノ上演ハ明治

1030 相馬屋藏

下字

十ハ千第二個ハ明治十六年三月ニシテ新場ハ  
 同ジノ其座、能儀ハ実川並ニ、市川其五郎等、  
 座附作者ハ勝遠花コレハ伴ノ勝花ナルベシ。第  
 三開ハ明治十一年十一月道頓堀弁天座、第四  
 開ハ明治廿一年五月中座ト浪花座トニ同時  
 ニ上演セリ。當時中座ニ備儀モ之片岡我智(今  
 ノ仁左衛門)ノ言フ所ニコレハ、當時ノ興行ハ創演  
 後五六回目ノヤリニ記憶ス。果シテ然ラハ、  
 明治十年ハ創演ニアラサルヤモ、  
 故ニ曰ク、  
 相崎文庫ノ創演年月ハ之ヲ精確

1056

下字

何トナレハ同シ頃同地角座ノ番附面ニ作者ト  
 之ヲ勝彦輔ノ名見エレハナリ。因リテ好フニ、  
 此際カ其脚本ノ最初ハ興行ニアラサル歟。或  
 ハ謂フ、該脚本ヲ初メテ上演セシハ西京ニシ  
 テ、其劇場ハ北座モシクハ南座ナリキト。右  
 ハ其際上演ニ備儀セリト稱スル或老人等ノ言  
 フ所ナレドモ、頗ル勝昧ニシテ其年月モ明カ  
 ナラカレ。其際ノ番附等モ未ダ曾テ見當ラザ  
 レ川證トハ之カタシ。明治十年以後ニハ、  
 大段ノ三三四回ヲ降ラザル興行アリキ。ス

1056

下字

王柳司相崎文庫ト同一題材ニヨリテ作ラレ  
 タル多少類似ノ脚本ハ他ニモ若干アリ。其少  
 少~~柳~~箱崎文庫ニ於キモ二種、共ニ東京ノ作者  
 河竹野阿弥ノ作ナリ。其一ハ筑紫巻浪白練  
 ト題シ、其二ハ黒白論分博多ト題セリ。  
 本来、王柳司箱崎文庫ノ主題トセル所ハ、俗ニ  
 柳ノ黒田騎動ニシテ、寛永年間ニ於ケル筑  
 前黒田家ノ内証ニ種々ノ加筆空ノ想像ヲ添會  
 シテ、縦マニ作り設ケタルモノナリ。早ヨリ

100 柳馬園

No. 71

下字

ハハ知ル能ハス。然レトモ早クモ明治四年以前ナ  
 ラサル、晚クモ明治十年以後ナラサルキヤ明カ  
 ナリ。  
 (勝能連父子の關係、京都南座、北座云々并  
 柳ノ黒田騎動ノ件は河竹其水ノ教道  
 田に據リ立言スルモノナリ。  
 一、右題ト同存又ハ類似ノ遠別脚本ヲ同一  
 人ニアラスシテ著作シタルモノアリヤ。  
 アケル

100 柳馬園

No. 70

下字

寛永箱崎文庫トイフ表題ニテ講師ノ古頭  
ニ上リ、又寫本トシテ(後ニハ刊本トシテ)廣  
坊間ニ行ハレタリシモノ是ナリ。前陳三脚  
本共ニ主トシテ右ノ講談本ヨリ題材ヲ得  
リシコト疑フカラズ。

野阿弥ノ作ハ、筑紫巻談浪白道ノ方ヲ先ノ  
作トシ、黒目論ノ方ヲ後ノ作トス。前者ハ  
明治八年十月、新富座劇演ニシテ、後者ハ  
明治十五年十一月、猿蓑座ノ劇演ナリ。  
右ノ三作ハ其材源同一ナル故ニ、事件ニ七

1020 袖馬置巻

下字

人名ニモ多少相似ノ點アルコト勿論ナレドモ、  
互ヒニ相負フ所ハ比較的ニ鮮ナリ。作集ニ  
紅葉ノ間ノ暗闘ト称スル一場面アリ。コハ  
野阿弥ガ其作筑紫巻談中ノ一齣トシテ創案  
セシモ、ハトシテ名高カリシガ、玉櫛奇箱崎  
文庫ニモ之ト相似タレ一場アリ。同ジク紅  
葉ノ間ノ暗闘ト称セリ。或ハ此一齣タケハ  
勝能進ノ諺義ガ野阿弥ガ作中ヨリ借り來レ  
ルモノカトモ疑ハル。諺義ハ本ト野阿弥配下  
ノ作者タリト故ナリ。其レトモ着シ玉櫛奇ノ

1020 袖馬置巻

下字

創演が明治十年ノ戎座興行ニハプラスシテ  
五年又ハ六七等頃ニ於ケル西京ニテノ興行  
ナラシメハ、斯ク断定セシハ早計ナルベクヤ。  
要スルニ、右三作ハ題材ハ相類似スト云モ、  
互ヒニ相負フ所ハ極メテ僅少ナリト評セン  
カクモ當ナルベシ。

三、右箱崎文庫ノ脚本使用料ハ大都會ト町村  
ニ對シ區別アリトスレバ、戸數高キ乃至貳千  
又ハ三千ノ町村ニ於テ何程ノ高價トスルカ、其

1020 相馬區

No. 74

下字

價格如何。

答

現今脚本使用料ニ關シテハ一定ノ標準ナル  
トシ、新タニ作ラレタル脚本ヲ創演スル場合  
ニスレバ、作者ニシテ豫メ要求ヲ提出セザル限  
リハ、其報酬額ハ使用者ノ好意ニ一任スル  
例多シ。隨ツテ其價格存外ニ低廉ナリ。又  
旧キ脚本ニシテ今尚ホ廣ク行ハルハ、第一  
一二指ヲ點阿孫ノ作ニ屈スルキ次第ナルガ、

No. 75

1020 相馬區



下字二

ニ對シテハ一興行檢圓以上ヲ要求セザルハ  
キハホゾ察セラレ。  
小玉櫛等相崎文庫ノ如キハ、前陳ニテ明カ  
ナル如ク、其創設以後、大坂市ノミニテモ既  
ニ少クモ四圓ノ興行ヲ經タル作ナリ。其價  
無時價ハ野河筋作ノ例ニ照ラテ推定セラレ  
テ當然ナラン。

以上

完4

下字

其數阿孫ノ作スル 都會興行ニ對シテ要求  
スル使用料(本鑑定者傳聞スル所ニ照リ  
ナクバ)甚々僅少ナルガ如ク、スナハチ、首都  
ニ於ケル一等劇場ノ二十五日之興行ニ對シテ  
スラ一興行五十圓以上ヲ要求セザルモノ、  
如ク。況ンヤ各地方ノ興行ニ對シタル場合ニ  
於テヲヤ。大坂、西京、名古屋十トノ十日  
間以上ノ興行ニ對シテスラ、一興行二三十  
圓ヲ上ラザルモノ、如ク。町村ニ於ケル興  
行ハ、概シテ三日又ハ五日ヲ限リトス。

坪内先生のこの一文は、まことに発表されるにあつたものですが、演劇と興行権との関係、  
この文は一般の版權問題について、重要な  
参考資料と思ふので、無理にゆゑ、  
ここに掲載することになりました。先  
生はすでに「絶坡西路の事」(新小説正月号)  
を著されたので、新聞雑誌への御寄稿を  
一切廃されたのであつたか、特にお志の  
懇話をおおハル下さつたのは、深く感謝す  
るるところであり、この……記者

坪内先生のこの一文は、まことに発表されるにあつたものですが、

演劇と興行権との関係、この文は一般の版權問題について、

重要な参考資料と思ふので、無理にゆゑ、

ここに掲載することになりました。先生はすでに「絶坡西路の事」

(新小説正月号)を著されたので、新聞雑誌への御寄稿を

一切廃されたのであつたか、特にお志の懇話をおおハル下さつたのは、

深く感謝するところであり、この……記者

……記者

……記者

新編小説全集

子部白雲山房

本間氏

共



